

『国性爺御前軍談』小考 — 一風・講釈・御前物 —

小畑 弥生

はじめに

元禄末年、『御前義経記』の刊行と共に浮世草子界にその名を広めることとなった、西沢一風。彼の諸作の傾向は主に時事への関心と演劇趣味で、それに古典をやつし、付会して構想を整えるものであった。当時の演劇界の風潮にすばやく注目し、「やつし」の手法や音曲の雰囲気を取り入れたことに一風の成功があったと言われているが、本稿では彼の作品における芸能利用——特にこれまで指摘の少なかった「講釈」「御前物」の利用に注目しながら、その手法を詳しく見ていこうと思う。また、それらを参考に、未だ編者に疑問の残る『国性爺御前軍談』について検証を行い、編者が一風であるということを目指したい。

一 近世中期の講釈受容

一風の講釈に対する意識を検証するにあたっては、当時の講釈についてみておく必要がある。まずは先行研究²⁾によ

りながら、そのことを考えてみよう。

講釈とは、一言で言うならば書物の意義を平易に説き聞かせる行為のことをいう。講釈と講談の差異については、学問授業の方法を論じた江村北海『授業編』（天明三年）に、次のような記述がある。

今世ニ誰彼モ、講釈講談ト相混ジテイヘドモ、講釈トハ、何ニテモアレ、講ズルトコロノ書ノ本文注解ヲ併セテ、其字義・文義ヲ解釈シテ云聞スコトニテ、其要、省明ニアリ：（中略）：講談トテモ、事ニヨリテハ、注解ヲ併セ説クコトアレドモ、大方ハ本文バカリナルベシ、大抵一章、モシ長キ章タラバ半章、又至テ短キ章ナラバ、二三章ニモイタルベシ、字義文義ヲクワシク和解シテ、俗耳ニ入りヤスカラシメ、今日ノ人情世態ニ親切ニシテ、聴ク人ノ程々ニ従ヒ、益アリテ害ナキヤウニ云キカスヲ主トスベシ。サラバトテ詼諧の談、バサラノ語、卑陋の諺ナドヲ用ユベカラズ。

（『授業編』四）

これによると、講釈と講談の区別はあったが、当時は既に

双方を「相混ジテ」口にしていたというから、人々はそれらの差異を正確には認識していなかったようである。よつて、本稿では以後「ヨミ」の文芸、いわゆる「声」の文芸を「講釈」と統一して表記する。

講釈のそもそもの始まりは、太平記読みであると言われている。太平記読みとは『太平記』をヨムことの朗誦化・芸能化であり、江戸時代初期に出現し、それにより講釈として発展したものである。太平記読みは、軍書の講釈でもっとも人気があり市中庶民の間で主流となっていた。『人倫訓蒙図彙』（元禄三年）巻七「勸進鋤部次第不同」の太平記読みの項目には、

近世より生まれり。太平記よみての物もらひ、あはれ昔は畳の上にもくらしたればこそ、つゞりよみにもすれ。なまなかかくてあれよかし。祇園の涼、糺の森の下などにては、むしろしきて座をしめ、講尺こそおこりならぬ。それを又こくびかたふけて聞ぬる者もあり。とかく生類ほど品々あるはなかるべし。

〔人倫訓蒙図彙〕七

とあり、講釈を勧進の類として説明している。『太平記』を読んで身過ぎの手立てとするには既に中世の頃より行われていたようだが、近世に入ると軍書講釈は武士たちの間だけでなく、よりいっそう庶民化・娯楽化することにな

る。これについて梶原正昭は「戦乱の戦国時代から泰平の江戸時代へと時代が移るにつれ、実用性の強いまじめな講釈から、娯楽性の強い興味本位の講談へと、その重点を変えていくことになるのは、自然の成りゆきといえる。」と論じている。⁽³⁾

さて、江戸時代に入り「辻講釈」「町講釈」として独自の展開をみせるようになった講釈であるが、庶民に身近なものになるにつれて、それらの史料も多く見られるようになる。例えば金平浄瑠璃の作者、岡清兵衛（？—貞享四？）は、『中古戯場説』（文化二年）に「江戸舌耕士の祖とも云ふべし。一生、太平記・楠が軍のみ談ぜし」と伝えられ、同じく浄瑠璃作者であった近松門左衛門は、「堺のゑびす島で栄宅と組んでつれづれの講釈も致されるけるなり」（『野郎立役舞台大鏡』貞享四年）との記述が残っている。都万太夫座で作者修行時代、生活営為のために講釈を行っていたようだ。また、大田南畝『瀬田問答』（天明五？—寛政二年？）には次のようにある。

今ノ講釈師ヲ、ムカシハ太平記読ト申テ、太平記、古戦物語ノミ講釈イタシ候処、享保ノ頃、瑞竜軒、志道軒ナド願ヒテ、今ノ三河後風土記ナドヨミ候事始候由承伝へ候、左様二候哉。

〔瀬田問答〕

長友千代治は「ここでは、太平記のみならず古戦物語、三河後風土記など、広く軍書一般を読むようになり、また瑞竜軒（赤松）、志道軒（深井）など一家をなす講釈師も出現していること、さらには太平記読みから講釈師と言われ
る者が出てきていることを明らかにしている」と述べる。

講釈師たちの姿は、この頃の文学作品にも多く登場する。井原西鶴『武家義理物語』（元禄元年）には、三人の武士が敵を求めて道頓堀付近を探し回る場面で、「出羽義太夫が浄るりのはてくち、又大夫が舞を聞人、竹田がからくりの見物、甫水が太平記をよめる所、其外浜芝居の小見せ物、水茶屋の客」との描写がある。この甫水という人物は『難波の白は伊勢の白粉』（天和元年）にも登場しており、大坂の天満天神でも『太平記』を読んでいたことが分かっている。また『好色一代女』巻五（貞享三年）には、道久という太平記読みの名があげられている。

さらに当時の講釈師の実態を詳しく伝えるものとして、近松の『大経師昔暦』（正徳五年）がある。ここでは自宅に講席を設けて講釈する場が描かれている。

京ぢかき。岡崎村におげんしやの。下やしきをば両隣中にはさまるしよげ鳥の。牢人の巢のとりぶきやね。

見るかげほそき釣あんどう太平記講尺。赤松梅龍としるせしは玉がためには伯父ながら。奉公の請に立他人

むきにて暮しけり。講尺はつれば聞手の老若出家まじりに立帰る。なんと聞事な講尺五錢づ、にはやすい物。あの梅龍ももう七十でも有ふが。一りくつ有顔付ア、よい弁舌。楠湊川合戦おもしろいどう中。仕方て講尺やられた所本の和田の新発意を見る様な。いかひ兵でござつたの。いづれも明晩くどちりくどにこそ別れけれ。

（『大経師昔暦』中之巻）

これは釣行燈を掲げた夜講釈の様子である。一人五錢の座料で、湊川合戦の楠木一族の奮戦ぶりを仕方話によつて講釈していたという。このころの講釈は、町の中に定席ができて、門付同然の「辻講釈」からいわゆる「町講釈」へとその比重が移り始めていたようだ。

これまでに挙げた史料からも分かるように、近世の講釈は町人にも幅広く需要があり、当時人氣のあつた浄瑠璃芝居などに比肩する芸能として、日常的に行われていた。このことを踏まえた上で次項に移りたいと思うが、一風の利出した「御前講釈」についてはまた後述することにする。

二 講釈・御前物への意識

さて、ここで一風の講釈に対する意識を詳しく見ていく。数多くの芸能利用を行う一風であるが、その中でも講釈の

場面が描かれた話は少なくない。題名に「御前」と冠する作品が三作品、加えて「御前物」と似た形をとる作品もいくつか書いていることから、一風が音曲と同じく講釈へのこだわりを持っていたことは言うまでもないだろう。ここでは一風の講釈の利用法などを参考に具体的な例を挙げつつ、この論点をより確かなものにするべく、検証を行っていきたい。

まず、その当時「御前物」がどのような位置付けにあったのか、簡単に説明しておく。宝永期の浮世草子を網羅的に考察したものに、長谷川強『浮世草子の研究』がある。それによると、当時の浮世草子は大きく分けて六種類に分類されるが、その中に「やつし物」というジャンルが存在した。別の言い方をすれば風流物とでも称すべき一群の作で、一風の『御前義経記』にならない、多くは「風流」・「御前」の文字を題名に冠する。もともと『御前義経記』の成立事情からも考えられるように、これらの作は好色物の一変相と見得るのであるが、好色物の上に古典色を打ち出すもの（やつし・俗解の類）と、演劇色を導入するもの（浄瑠璃・歌舞伎に想を借り、翻案を行うもの）であり、「御前」というのは更にそれを貴人の前に演述する体にして統括するものであるという。元禄期に『御前義経記』が刊行され

たことで、以後「風流」または「御前」の文字を冠した題名の作が続出したらしく、「御前」を冠する作は、御前講釈を発端とする本書の構成に、何らかの形で追随しようとするものであると長谷川は述べる。実際に「御前」という文字を題名に冠するものがどれほど流行していたのか、浮世草子年表類を参考に調べてみると、一風の著作以外に次の五作品の名があがった。

『御前伽婢子』都の錦（元禄十四年序・同十五年刊）

『御前独狂言』西鶯（宝永二年刊）

『後前可笑記』作者未詳（宝永三年刊）

『傾白御前追従』作者未詳（享保元年刊）

『御前千疋猿』作者未詳（享保三年刊）

また、この他にも『風流神代巻』（元禄十五年）の奥付に「御前重寶元禄徒然舛」八巻近刊の予告が見えたりする。

とは言え、『御前義経記』刊行後に続出したのは、むしろ一風の演劇導入や古典をやつす手法を取り入れた、「風流」の文字を冠するものであったのだろうと思う。しかしその中にも、以下のような趣向のものがある。現物は未見のため、ここでは長谷川の研究（『浮世草子の研究』二六一頁）を参考にした。

「風流仕形舞」（半紙本五冊、宝永三年正月刊）は各巻一章より成り、目録に題名傍に「付タリ座敷上留利」、

表1

目録章題下に「手づま人形大名のまね」・「ゆび人形女
方の物まね」・「糸あやつり若衆方の物まね」・「水から
くり敵役の物まね」・「なんきんからくり花車方の物ま
ね」とある。序は太郎冠者の口上の体を成し、太郎冠
者が主の前で都の名所を仕方舞にして見せるに題名は
由来するが、全篇芝居がかりなる故の題でもあらう。

これによれば、題名に「風流」の文字を冠する作品の中に
も、「御前物」の形式をとるものが存在したことが分かる。
このような趣向を持つ作品は、少なくなかったのではな
いか。一風が浮世草子に「御前講釈」を取り込んだ理由、
またそれが流行した背景として、思うに、講釈が当時す
で町人の文化になっており、庶民の興味を引いたとい
うことが考えられるのではなからうか。

では実際に一風がどれほど講釈への意識を持っていたの
か、彼の作品における具体的な講釈の利用法をいくつか見
ていく。

『御前義経記』

○一之巻・序「大名の酒盛」

太郎くはじや 近比ははめいわくなる御所望。然共一命をか
けたてまつる主君の御意。仰出さるゝはりんげんにひ
とし。じたい申は不忠に似たり。はゞかりながら我ノ

ひとりねの友ほうこ。わけなき恋の道しるべ。殿様
のはらをよらしますが御奉公。御ゆるさるゝうへはざ
つと読たてまつらんと。子細らしくぬりけんだいに一
部の書を立。長ばかまの折めた、しく。御前まぢかく
よつてよまんとするを、大名までく太郎冠者。扱此本
の外題は何といふぞ。太郎くはじやさん候。一部八冊の一
名を風流義経記と申ます。然ども只今お目通にて読た
てまつれば。今日より御前義経記と仕りませう。

雨天が続き暇を持て余す大名が、太郎冠者次郎冠者を呼ん
で仮名草子を語らせる形式で、このあと『風流義経記』改
め『御前義経記』が語られていく。

○三之巻・二「御前道行」

太郎くはじやとの様へ申あげます。大名何事じや。長事さぞ
御たいくつに思召ませう。扱是より観了と今義が似せ
比丘尼にて。関の地藏までくたりますを。名所道行に
書。すなはちふしを付て語ます。三味線は次郎冠者が
ひかれます。音曲にてお聞なされませうか。但し素読
仕ませうか。

三之巻ではこのように、話の途中で太郎冠者が大名に語り
かけるといふ場面が挟み込まれている。大名への言葉は、
読者への呼びかけも意図しているのであらう。ここから

先、面白い趣向を盛り込んでいるのだということを示して、読者の注意を引こうとしたのではないだろうか。さらに、一之巻の序の挿絵に講釈の場面を用いながら、ここでもまた御前講釈の様子を詳細に描いている。挿絵の画者にどれだけ作者の意図なり注文なりが伝えられていたかは問題である。長谷川によると、後期の江戸の小説の場合はその実態がつかめるのに比べて、浮世草子の場合、作者と挿絵画者の間の連絡如何ということは明らかでなく、末期の浮世草子などには本文と食い違った挿絵が時々見られるよう^だ。しかし一風の作品の場合、序を含め本書の趣向に深く関与する挿絵が多く描かれていることから、おそらくこれは一風の注文に従って描かれたものであらうと考えられる。

○六之巻・二「四方髪の傾城」

菅原とやらいふ女郎の。八嶋の講談するよし。是はめづらしい傾城の物語。今がはじめ。いざ此宿に入。…(中略)：暫あつて菅原かぶろの竹之丞に打かけとらせ。紫ふくさの結をとかせ。一冊の本をひらいて見台にすへ。扱皆様へ申ます。まことに我。人にまかする身なれ共。子細あつて下ひものむすび。とく事のならざりしを。あふ客ごとに語。わけたてぬ替に。つれく

草。伊勢物語の素読して。一座の興になして。一日くつとめに日をか、す事もなかりき。此比のお客は。曾我物語か義経記をよんできかせとの御所望。曾我はつとめの秘伝の事。わしらが身のうへにてはさしあひ。それゆへ此比より義経記の素読致ます。…(中略)：此八嶋の段は義経記に書のせませねど。爰はわしが才覚にて。増補やらんに仕ました。皆様ねむたくときいてくだんせんといふに。是より八嶋の講談今義が旅の途中立ち寄つた宿で出会う、菅原という女郎(のちに今義の母常盤と判明)が講釈を行う場面である。口上部分が詳しく述べられており、実際に講釈の場に居合わせたかのような感覚を与える。流行芸能の取り入れを常套手段としていた一風であるから、当時はこのように女郎による講釈というものも、現に行われていたのかもしれない。

『女大名丹前能』

○初巻・序「殿様の物好」

罷出たる者は。去お大名様の奥方に召しつかはる、次郎冠者でござる。兄太郎冠者は。殿様方に勤。昼夜隙なき身なれど我と楽む寝やのとほし火。反古のうらに千鳥の足跡。入乱たる言の葉を書ちらし。一名を御前儀経記と題し。あづさにちりばめ世の笑草となしぬ。

有つれく。其一部を御前にて読奉り。…(中略) …
近日殿様。奥へおなりのよし。…(中略) …奥様より
の仰。おさへには茶道の林斎。おとぎ役には此次郎冠
者。其外御用あるべき人相応の見つくり。よろしく
はからへとの仰事也。

『女大名丹前能』は、この序からも分かるように前作『御前義経記』の姉妹編として構想が立てられている。『御前義経記』で殿に氣に入られた太郎冠者の弟次郎冠者が、奥方より御伽を命じられ、殿と奥方の前で腰元らに丹前能を演じさせる。以下その物語だという趣向である。前作の好評を追ってか、全体の筋立ても手法もほぼ踏襲しており、一風がこの作品を『御前義経記』同様「御前物」として著したことは間違いない。

『風流今平家』

○一二之巻・序「恋暮かこち草」

姫御機嫌一かたならず既に御酒えん中場え。瞽女のよし参りしかば。いよくよろこばせ給ひすぐに盃給はり。何にても替し音曲。又珍敷咄のあらば語きかせとの仰。…(中略) …此程去屋敷に風流今平家と申本をもてあそび給ひぬ。よませ給ふを聞に。昔の平家物語にことよせ当世のことはざ。哀れなる事面白き事のみ

なりき。有増覚はんべりぬ是をやお咄申さん。殊に地読の外音曲所有。琴三味線にてあふもふしぎあはぬも時の笑草。いかゞ仕らんといふ迄もなし。とくくとの御所望にまかせ。出る儘の妖言皆様御免なりましたう。

ある裕福な浪人の息女の前で瞽女の与志が読み聞かせたという発端を設け、人形操りの文句に町人の心得を説く。人物・事件を全編『平家物語』に付会し、章題にその典拠を示す点など、これもまた『御前義経記』と同一手法をとる作品である。『蔭涼軒日録』(文正元年)に、眼を患っている江見河原入道という人物が『太平記』を読んだという記録がある。与志の場合もこれと同じく、諳んじての朗読と思われる。講釈には書物なしのいわゆる無本の場合をも含むことが分かる。

『風流御前二代曾我』

○一之巻・一「傾城曾我のうつしゑ」

はづかしながらわたくしこと。京嶋原大坂やの吉野と申た傾城であんす。…(中略) …はたち迄勤し所に。去おやしきがたの殿様に身請せられ。よい身には成ましたれど。此はるのころより御前様江めし出され。よるのおとぎを申ます。明暮のおなぐさみに有程のこと

を仕つくし。きく程のことをお咄申で。今はなんにもない知恵をふるへとの仰。ぞんじませぬといふおなくさみもなければ。しあんをいたしませうとぞんじます。あい手なければせんかたつき弓。あるにもいられず、なんとしやう。かとしやう。ア、ま、よ此間気をもむゆゑか。…(中略)…御前様よりは早、仕立と有御使者たびくなりければ。ぶんにくりこと有べし。思ひ付あしきはもんもふ第一のわれく。其段は御免の蒙り。御前様ゑのおとりなしよしなに御評判く。

島原大坂屋の吉野がさるお屋敷の殿様に身請けされ、御前での夜の御伽に芸も話も仕尽くし、思案に疲れて『曾我物語』を枕に眠る。すると夢に曾我兄弟が現れ『略曾我二代男』という一巻の書を与えていく。それを御前に捧げ、家中の筆まめな者に六巻に書きのばし、慰めになるよう作らせたという話である。全体としては読者周知の『曾我物語』をそのまま剽窃し、各章題に原拠となる箇所を示す。一風の得意とする手法である。

このように、一風の作品には講釈の場面、また御前物の方法が見られる箇所が多く散りばめられている。彼が音曲と同じく、講釈に対し強い意識を抱いていたことが、今回具体例を挙げることで、より明確なものになったと言える

だろう。

三 『国性爺御前軍談』における御前物の方法

これまで一風の御前物(またはそれに近い趣向をとるもの)の利用方法を見てきた。次はそれらを参考に、『国性爺御前軍談』について新たな検証を行いたい。

『国性爺御前軍談』は享保元年に刊行された、大本五冊からなる浮世草子である。本作は近松門左衛門の浄瑠璃『国性爺合戦』(正徳五年十一月より大坂竹本座初演)の人氣にあやかり浮世草子風に仕立てたもので、節付けを除きほとんどは原作をそのまま用いている。序には「作者近松門左衛門、素読西氏安斎」と記されるのみで、西沢一風の署名は見当たらない。

野間光辰は『国性爺御前軍談』と『国性爺合戦』の原拠について³⁾の中で編者推定を行い、編者は作中登場する「西氏安斎」で実は西沢一風であると述べるが、しかし一風に「安斎」なる号があったかどうか未詳である。この論の発表後も、編者については再検討が必要であると言われてきた。例えば『西沢一風全集』では、一風作として第三巻に収録されるが、その解題(佐伯孝弘執筆)では作者認定に關しての疑問を投げかけている。確かに全編を通して

『国性爺合戦』の丸本がそのまま引用されているため、一見編者の存在や意識が見えにくい感じがする。長谷川は『浮世草子考証年表』（昭和五十九年、青裳堂書店）に掲載せず、「浄瑠璃の大幅な利用から浮世草子とはいえない」として「劇関連書」として扱っている。だが、この作品にはまさしく、前節で取り上げた一風の御前物における特徴が、顕著に表れているのである。

そこで従来の研究を踏まえつつ、『国性爺御前軍談』（以下『御前軍談』と略す）の編者推定を行う。未だ疑問の残る編者なる人物が、西沢一風であるということ指摘したい。

享保十二年（一七二七）刊、浄瑠璃『今昔操年代記』の中で一風は、以下のように語っている。

筑後芝居相続如何と町中門弟おもひの外。竹田出雲頼知発明より。国仙爺合戦といふ浄るりのおもひ付。門左衛門老功の一作。力瘤を出し。文句のはだへうるはしく書まはしたる筆勢。おもしろく浄るりは竹本政太夫。竹本頼母。豊竹万太夫右三人にてあしかけ三年持こたへ。見物から子鬻の道行口まねせぬ人なし。筑後掾存命の比あやつり上るりしかくなかりしが。諸人哥舞伎芝居よりおもしろきともてはやし。次第く

はんじやうする事。第一作者の趣興。人形いしやう。道具まで花やかにこしらへ。手をつくし美をつくせば。歌舞伎は外に成て。浄るりの評判はしくつぢく。耳かしましくおもひまいらせ候。

（『今昔操年代記』下之巻）

『国性爺合戦』の人氣ぶりを評し、また「近松門左衛門は作者の氏神也」「今作者と云る、人く。みな近松のいきかたを手本とし書つゝる物也」と、浄瑠璃作者としての近松を絶賛している。正徳五年、大坂竹本座で初演が行われ大当たりをとった『国性爺合戦』は直ちに歌舞伎化されたり、浮世草子に類似作を生んだりして、一種のブームを巻き起こした。人氣芸能の取り入れを得意とした一風が、このブームに乗じないはずがない。『御前軍談』は『国性爺合戦』がまだ竹本座で人氣を博していた享保元年に刊行されている。ここからは野間の研究（前掲）を参考に、具体的な「御前物」の方法を挙げていく。

まず注目したいのが、序の構成である。本作は「きいたかく。きいたぞく」と、下郎である米八・麦介二人の語りから始まるのだが、序全体がどこか芝居染みた作りになっている。概略は以下のようなものである。

このたび若殿様御入国について家中お慰めのためにと、「茶道安齋」が五冊の本を持参して、当時流行の『国性爺

御前軍談」という「仮名草子」を朝夕御目前にて素読申し上げる。続く一の巻から、その内容が語られていく形式で、そこからはほぼ『国性爺合戦』原作からの引用となつてゐる。序や凡例の中でこのような芝居がかった趣向を取り入れることは、一風の「御前物」の中ではよく見られる。『御前義経記』の浮太郎冠者、『女大名丹前能』の次郎冠者、『風流今平家』の与志がそれである。本作では安斎が講釈する趣向になつており、本文中にもしばしば安斎の口上や注釈が挟み込まれたりする。

○三之巻・二「錦祥女親子の姿くらべ」

扱いづれも様へ申あげます。誠に日本人の心と申は。男女ともにふてきにはござりませぬか。現在の女房現在の親に縄をかけ。髻のかんきが心をもしらず。よふは敵の方へわたしも渡しました。女ながらもわれと縄をかゝり城内へ入も入たり。もろこし日本とてか程まで心のちがふものかは。…(中略)…此間を暫中入に仕休息のおひまをねがひ。お茶ひとつくたさります。こゝろまかせにつかまつれ△有がたや休息仕りましたゆへ。のどあぢが心よふ成ました。さらば此つゞきを讀ませう。

○三之巻・三「五常軍かんきが仁義」

なんと此段は義理ばつてあはれをふくみ。おんあいに

もせのわかれ尤らしくぞよみいたしながら。おもはずらくるい。仕りました。殿様がたはかく別御前様おつばねがたおこしもと衆。いづれもお目の内がどみました。これよりそろ／＼めのさめる段。休そく仕らずすぐによみましやう。とてもものに御聞きたさりますふ。

○四之巻・一「小むつが知恵鏡」

扱此間の嶋めぐりを私のさいかかにて。若殿様のおめとをりにてあやつり仕り。人形つかはせおめにかけます。則上るりは先のはりま大夫かたられました嶋めぐりをすぐにかたります。上るり人ぎやうしやみせんなど。ぶ調法がちにござりませうけれども。其だんはしばしのおなぐさみおわらひぐさとおほしめし。御きげんよう御らん下さりませふ東西／＼。

三之巻・二の傍線箇所は、文字通り原作の受け止め方を講釈している部分である。また四之巻では嶋めぐりを操にかげ、わざわざ挿絵を用いて安斎座敷浄瑠璃の体を示す。このように、作中に講釈の場面を挟み込み、さらに浄瑠璃などの音曲を挿入して読者の興味を繋ごうとする方法は、『御前義経記』またそれ以後の一風の御前物作品に共通するものである。このような方法が、他の御前物（一風作品以外）でも取り入れられていたかどうかは、現段階ではつきりと

述べることはできない。

しかし、これはあくまで参考程度ということにはなるが、同じ「御前」の文字を冠する題名の作品で、西鶯作「御前独狂言」（宝永二年）がある。これは序に「作者が独狂言世の人さまの御前へおかしからぬ文詞」とあることから、その題名の由来を知ることができる。実際に主の前で語る講釈のシーンを設けるわけではなく、世の人々（読者）を御前に語るといふ形式をとっており、序と本文の直接的な繋がりはありません。つまり一風の得意とした御前物の手法とは、少し違っているのである。『御前軍談』のように、序の段階から芝居がかりの趣向をめぐらし、そこで読者の関心を一気に引きよせる方法は、やはり一風の常套手段だったのではないだろうか。

では、次に『御前軍談』の前後に刊行された一風の浮世草子、特にその版元・画者に注目したい（表参照）。なお各項の記述は『西沢一風全集』解題に拠るものである。

表

書名	版元	画者
元禄六年 【新色五巻書】	万屋仁兵衛	蒔絵師源三郎風
元禄十二年 【御前義経記】	油屋与兵衛・万屋仁兵衛 雁金屋庄兵衛・上村平左衛門	蒔絵師源三郎風
元禄十四年 【寛濶曾我物語】	万屋仁兵衛・油屋与兵衛／藤七良	未詳
元禄十五年 【女大名丹前能】	金屋市兵衛	未詳
元禄十六年 【風流今平家】	菊屋七郎兵衛	未詳
宝永二年 【傾城武道桜】	菊屋七郎兵衛	未詳
宝永三年 【伊達髪五人男】	菊屋七郎兵衛	未詳
宝永五年 【風流三国志】	菊屋七郎兵衛	未詳
宝永六年 【風流御前二代曾我】	菊屋七郎兵衛	未詳
宝永七年 【けいせい伽羅三味線】	菊屋七郎兵衛	未詳
正徳六年 【今源氏空船】	菊屋長兵衛	西川風
享保元年 【国性爺御前軍談】	菊屋長兵衛	西川風
享保二年 【色縮緬百人後家】	菊屋長兵衛	西川風
享保三年 【乱脛三本鍵】	菊屋長兵衛	西川風
享保十四年 【熊坂今物語】	菊屋長兵衛	未詳

このように『風流今平家』以降の作品は、すべて菊屋から出版されている。菊屋七郎兵衛は、浮世草子において八文字屋と元禄末年より対抗し、正本屋以上に力を注いだ人物である。宝永までに菊屋より刊行された浮世草子を見てみると、質の点はとにかく量においては八文字屋を上回っている。その中でも一風の浮世草子が大半を占めることから、長谷川は「ここに菊屋と一風のなみなみならぬ関係がうかがはれる」と述べ、菊屋と八文字屋との競り合いの立役者は一風であったとしている。

『今源氏空船』以降版元となっている菊屋長兵衛は、おそらく菊屋七郎兵衛の親族であろう。『御前軍談』前後の浮世草子の版元が、一貫して菊屋長兵衛（文生堂）から出版されていること、加えてその画者も「西川風」と、画風に共通性が見られることは、編者推定の際、見落としてはならない情報だろう。既に周知の事実かもしれないが、『御前軍談』の編者が一風であることを補足するものとして、ここに改めて提示しておきたい。

さらに一風は、序文の月日に「今月今日」と記す例が多く、『今源氏空船』『御前軍談』『色縮緬百人後家』『乱脛三本鐘』『熊坂今物語』の序にはすべて、共通してその文字が見られる。長谷川の述べるように、日付を今月今日とするのは一風に限ることではないが、これもまた一風作品の特徴の

一つとして、些事ながら編者確定への補足になるのではないだろうか。

以上、『御前軍談』における特徴として、次の三点について述べた。

- ①序・凡例に芝居がかった趣向をめぐらす。
- ②前後の刊行書の版元が同一、画風も似通っている。
- ③序の日付を今月今日とする。

これらの点により、『御前軍談』の編者は、西沢一風である可能性が高いと思われる。人気浄瑠璃『国性爺合戦』をそのまま読み物として仕立て直し、自身の趣向を凝らした序を添え、目録・挿絵を加えて浮世草子化する。「目で読む芝居」という意味で、これもまた、新しい浮世草子と言っても良いだろう。『御前軍談』の刊行は、演劇芸能と浮世草子それぞれが影響を与え合っていた時代の、一風の新たな試みだったのではないか。

注

- (1) 井上和人『御前義経記』の素材と方法―義経説話と近松浄瑠璃を補う(『江戸文学』二三号、平成十三年六月)、神谷勝広『御前義経記』小考―浄瑠璃との関連を軸に(『日本文学』五二

- 一〇号、平成十五年十月。
- (2) 中村幸彦『著述集』第一〇巻、および注(3)(4)など。
 - (3) 梶原正昭『「太平記」読みから講釈へ』(「太平記」昭和五十五年、集英社)
 - (4) 長友千代治『江戸時代の書物と読書』(平成十三年、東京堂出版)
 - (5) 長谷川強『浮世草子の研究』(昭和四十四年、桜楓社)
 - (6) 長谷川強『浮世草子の研究』(前出) 所収「浮世草子年表(宝永元年以降)、野間光辰『国語国文』第二三巻所収「浮世草子年表(一)〜(四)」(昭和二十九年)
 - (7) 長谷川強『浮世草子の通俗軍談と「国性爺合戦」』(『国語国文学研究』二号、昭和四十一年十二月)
 - (8) 『近世芸苑譜』(昭和六十年、八木書店)
 - (9) 注(5)に同じ
 - (10) 注(5)に同じ

※一風作品の引用は「西沢一風全集」(汲古書院)による。